

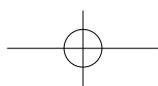
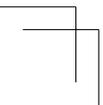
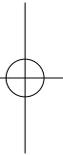
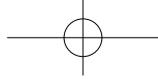
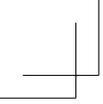
# 西島遺跡 8

—福岡県小郡市三沢所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第281集

2013

小郡市教育委員会



## 序

この報告書は、小郡市教育委員会が平成24年度に実施した西島遺跡8の発掘調査の記録です。西島遺跡は、昭和45年に福岡県教育委員会によって行われた発掘調査に始まり、弥生時代から歴史時代を中心とした集落遺跡であることが明らかとなっています。今回の調査によって、丘陵斜面上に営まれた住居や貯蔵穴などの弥生時代集落の一部を確認することができ、当時の土地利用の在り方を考える上での好資料となりました。

埋蔵文化財は、地域の歴史を知るうえで欠かすことのできない文化遺産です。本書に収録したこれらの資料が、文化財に対する認識と深い理解のために、また教育、学術研究の一助になれば幸いです。

発掘調査にあたり、地元西島区の皆さまならびに社会福祉法人長生会をはじめ、多くの方々のご理解とご協力に厚くお礼申し上げます、序文といたします。

平成26年3月26日

小郡市教育委員会  
教育長 清武輝

## <例言>

1. 本書は、小郡市三沢地内における建物建築に伴って、平成24年度に小郡市教育委員会が実施した西島遺跡8の埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 発掘調査に伴う整理作業は平成25年度に実施した。
3. 遺構実測は龍孝明が中心に行い、上田恵、朱雀聡一郎の補助を得た、遺構写真は龍が撮影した。遺跡の航空写真は有限会社 空中写真企画に委託し撮影した。
4. 遺物復元・実測は龍のほか阿南翔悟の補助をえた。製図は、久住愛子のほか龍がおこなった。
5. 遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
6. 本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T. P.）を基準とした。
7. 遺構・遺物実測図、遺物、写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
8. 本書の執筆・編集は龍が担当した。

## 本文目次

第1章 調査の経過と組織	1
1. 調査の経過	1
2. 調査の体制	1
第2章 位置と環境	2
第3章 遺跡の概要	6
第4章 遺構と遺物	6
(1) 住居跡	6
(2) 掘立柱建物	8
(3) 甕棺墓	8
(4) 貯蔵穴	8
(5) 土坑	10
(6) 炉跡	11
(7) その他の遺構と遺物	18
第5章 調査の成果	19

## 挿図目次

第1図 西島遺跡8と従前調査区配置図 (S=1/2,500)	1	第10図 1～3号土坑実測図 (S=1/30)	12
第2図 周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)	3	第11図 貯蔵穴出土土器実測図 (S=1/4)	13
第3図 西島遺跡8全体図 (S=1/250)	5	第12図 1号土坑出土土器実測図① (S=1/4)	14
第4図 1・2号住居跡実測図 (S=1/60)	7	第13図 1号土坑出土土器実測図②、 2・3号土坑出土土器実測図 (S=1/4)	15
第5図 1号住居跡出土土器実測図 (S=1/4)	9	第14図 炉跡実測図 (S=1/60)	16
第6図 掘立柱建物実測図 (S = 1/60)	10	第15図 炉跡出土土器実測図 (S=1/4)	17
第7図 甕棺墓実測図 (S=1/20)	11	第16図 ピット・包含層出土土器実測図 (S=1/4)	18
第8図 甕棺実測図 (S=1/6)	11	第17図 出土石器・石製品実測図 (S=1/4)	18
第9図 貯蔵穴実測図 (S=1/40)	12		

## 表目次

第1表 遺物観察表	20
-----------	----

## 図版目次

図版1① 調査区北西部 全景 (東から)	図版4① 貯蔵穴 土層 (南西から)
図版1② 調査区南東部 全景 (真上から)	図版4② 貯蔵穴 遺物出土状況 (南西から)
図版2① 住居跡と炉跡 全景 (北東から)	図版4③ 甕棺墓 遺物出土状況 (東から)
図版2② 掘立柱建物 (南西から)	図版4④ 炉跡 完掘状況 (北東から)
図版2③ 1号土坑 遺物出土状況 (東から)	図版4⑤ 炉跡 燃焼部近景 (北東から)
図版3① 1号住居跡 完掘状況 (北東から)	図版4⑥ 炉跡 燃焼部土層 (北東から)
図版3② 1号住居跡 南北土層 (南東から)	図版5 出土遺物
図版3③ 1号住居跡 東西土層1 (北から)	図版6 出土遺物
図版3④ 1号住居跡 東西土層2 (北から)	図版7 出土遺物
図版3⑤ 2号住居跡 完掘状況 (北東から)	図版8 出土遺物
図版3⑥ 2号住居跡 東西土層 (東から)	図版9 出土遺物

# 第1章 調査の経過と組織

## 1. 調査の経過

西島遺跡8の発掘調査に至る発端は、社会福祉法人長生会より提出された「特別養護老人ホーム建設」に伴う埋蔵文化財の有無についての照会に始まる。これを受けて小郡市教育委員会では、申請地を対象に試掘調査を実施した結果、大型の遺構と土器片等が確認されるに至り、集落遺構の存在が想定された。この結果に基づいて、平成24年6月6日付けで、埋蔵文化財の届け出が提出され、協議の結果、発掘調査を実施するはこびとなった。平成24年度に現地調査。平成25年度に報告書作成を実施する内容で協定書を取り交わした。

発掘調査は、平成24年7月2日から同年8月29日にかけて実施した。調査の主な経過は以下のとおりである。

7月2日重機による表土剥ぎ開始 17日遺構掘削開始 25日調査区北側の全景写真撮影 31日調査区反転

8月6日調査区南半の遺構掘削を開始 22日調査区南側の全景写真撮影 23日道具撤収 29日調査完了

## 2. 調査の体制

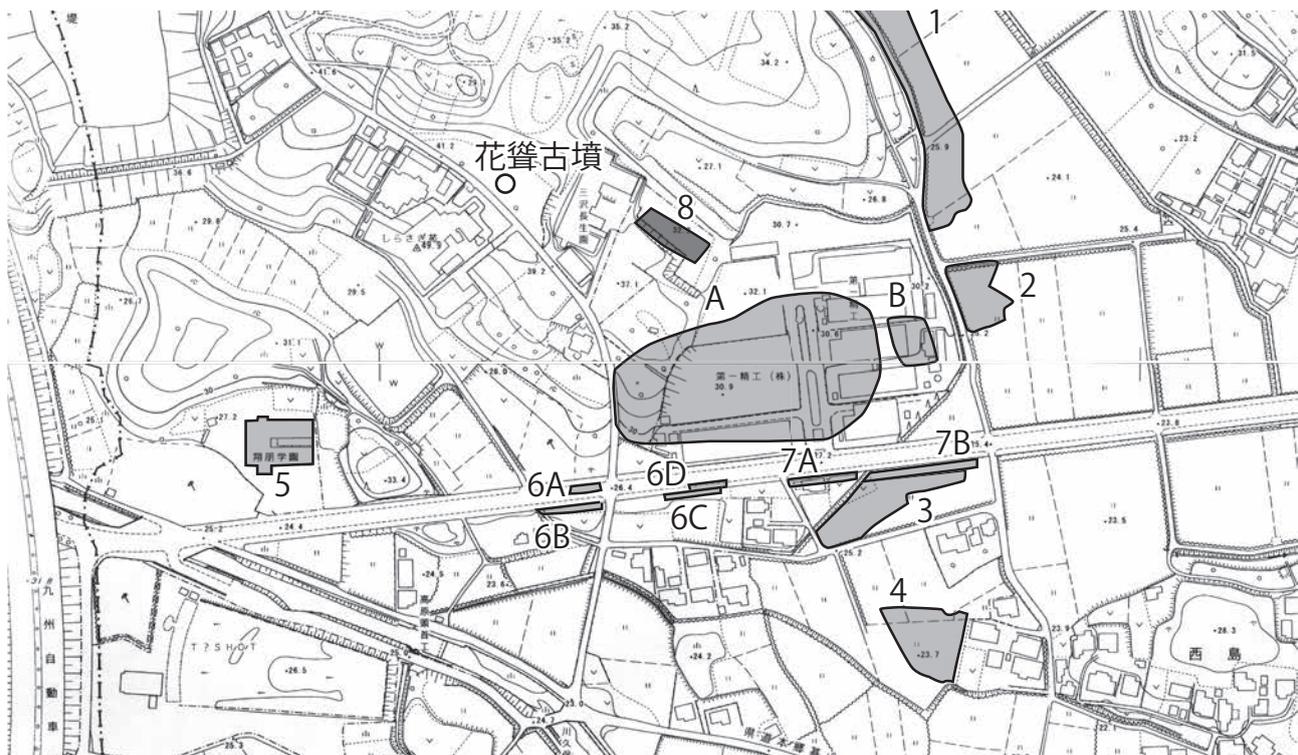
西島遺跡8の調査体制は以下のとおり。

### 【平成24年度】

小郡市教育委員会	教育長	清武 輝
	教育部長	吉浦大志博
文化財課	課長	片岡宏二
	係長	柏原孝俊
	技師	上田恵
	技師	龍孝明

### 【平成25年度】

小郡市教育委員会	教育長	清武 輝
	教育部長	佐藤秀行
文化財課	課長	片岡宏二
	係長	柏原孝俊
	技師	龍 孝明



第1図 西島遺跡8と従前調査区配置図 (S=1/2,500)

## 第2章 位置と環境

西島遺跡は、脊振山系から派生する三国丘陵の南西部洪積台地上に位置する。西島遺跡の西方約300mで佐賀県基山町との県境となる。

三国丘陵は小郡・筑紫野ニュータウン計画による開発によって、大規模な発掘調査が行われた。西島遺跡は過去にA、B区、1～7区の計9地点で調査が実施、報告されている。標高25m前後の洪積台地上から丘陵上にかけて、集落、甕棺墓や古墳群が立地している。

三沢水島遺跡、三沢栗原遺跡の北側では旧河川が検出されている。三沢水島遺跡では弥生時代中期前半頃の井堰、杭列などが検出されており、プラントオパールを検出結果から限られた箇所での水田耕作が行われていたことが想定されており、当時の河川利用の方法が明らかとなった。また、伊勢山神社から南東220mの地点からは箱式石棺が1基検出されている。出土遺物は皆無であったが、構造や規模などから弥生時代のものと推定されている。昭和45年7月に家屋建設に伴い、福岡県教育委員会によって発掘調査が実施されている。調査地点は西島遺跡8区から北西に約250mの距離に位置する。調査区の詳細な位置は不明ながら、住居跡2軒が検出されている。1軒は削平されており、プランの確認も困難であったが、もう1軒については、弥生時代中期の長方形住居で良好なセット関係をもつ土器が出土している。昭和45年末頃には、工場建設のため、8区に隣接する敷地の地下げが行われている。これに際し、遺構の分布状況と遺物の表面採集を行っていた山本信夫氏によって、急きょ遺構の調査が実施されることとなった。この土地は周辺集落の共同墓地として利用されており、敷地の大半が削平を受けていたが、破壊を免れていた丘陵東端部のA区では、トレンチ調査の結果、弥生時代中期に属する甕棺墓15基と先行する土坑墓4基が検出されている。丘陵西半分のB区は、本来丘陵の頂上部にあたり、大きく削平されていたため、詳細は不明であるが、竪穴住居7、弥生前期の貯蔵用竪穴2、中期の土坑42基、これに後出して北東寄り土坑墓8基、箱式石棺墓1基が一群をなし、中央南寄りで1辺10mほどの方形周溝墓（中世の方形墳墓か）1基、北端では箱式石棺と思われる石材が1、2基分散乱していたということである。また、「昭和48年（中略）新たに発見された弥生時代中期の住居1基を、福岡県教育委員会が調査した」（山本1974）との記載があるが、詳細は不明である。

西島遺跡周辺では、昭和36年、馬耕中に箱式石室が発見され、封土は削平されていたものの古墳と考えられ、小郡町教育委員会と福岡県教育委員会によって調査が行われた。石室内から人骨と直刀1、鉄鎌26、短甲、鉄鎌、鉄鋤先が出土している。

昭和44年には、高速道路建設に伴い、西島遺跡の西側に位置する伊勢浦を挟んだ丘陵上で佐賀県教育委員会によって伊勢山遺跡の発掘調査が実施されている。トレンチ調査であったが、計8軒の住居跡が検出されている。集落の全容、規模は明らかとなっていないが、これらの住居跡は低丘陵の最高処付近に密集しており、一つの集落を形成していたと推測されている。検出された竪穴住居は1辺5mほどの方形プランであり、古墳時代中期に属するものである。この竪穴住居は廃絶後に祭祀場として利用されたことが推定されている。出土遺物として滑石製玉類、模造品、材石などが出土していた。

昭和50年頃には丘陵の削平工事が開始され、花笠2号墳の墳丘が確認された。西島遺跡2区では、4軒の住居跡（20～23号住居）から滑石製玉類未製品が多量に出土しており、加工に使われた砥石も出土していることから、滑石製品の工房と推測されている。また、前述した600m西方に位置する佐賀県三養基郡基山町の伊勢山遺跡においても同様の滑石製品が出土しており、当遺跡との関連を窺わせる。そのほかに弥生時代中期前半の土器焼成遺構も検出されており、当地の拠点的な生産集落と考えられる。西島遺跡の西隣の丘陵には西島花笠古墳群があるが、正式な調査が行われないうまま破壊された。本調査区の北西約500mには基山町の伊勢山遺跡が位置しており、標高40m前後の立地に古墳時代の竪穴住居が検出されている。周辺は数基の横穴式石室を有する小円墳群の伊勢山古墳群があったが、すべて消滅している。本調査区の西400mでは箱式石棺が検出されている。

1・2区の調査から、西島遺跡の集落が弥生時代中期前半から形成され、欠落する時期があるものの



1. 西島 8
2. 横隈上内畑 7
3. 小郡大原町 4
4. 津古内畑 5
5. 三国小学校 6
6. 一ノ口 7
7. 小郡中尾 8
8. 津古上ノ原 9
9. 三沢牟田々
10. 干潟向畦ヶ浦 11
11. 大崎井牟田 12
12. 津古土取 13
13. 横隈山 14
14. 力武内畑 15
15. 横隈北田 16
16. 横隈鍋倉 17
17. 三国の鼻 18
18. 小郡 (官衙)
19. 大板井 20
20. 横隈中内畑 21
21. 横隈狐塚 22
22. 津古生掛 23
23. 津古 2号墳 24
24. 津古 1号墳 25
25. 三沢畝道町 26
26. 寺福童 27
27. 大崎中ノ前
28. 小板井屋敷 29
29. 大崎小園 30
30. 津古片曾葉 31
31. 福童町 32
32. 小板井屋敷 43
43. 花簗 2号墳 34
34. 花簗 1号墳 35
35. 横隈山古墳 36
36. 三沢栗原
37. 井上薬師堂東 38
38. 井上北内原 39
39. 花立山古墳群 40
40. 花立山穴観音古墳 41
41. 三沢古墳群 42
42. 三沢京江ヶ浦 43
43. 干潟城山
44. 上岩田 45
45. 小郡前伏 46
46. 松崎六本松 47
47. 稲吉元矢次 48
48. 横隈仕解田 49
49. 大保龍頭 50
50. 小郡正尻 51
51. 大保西小路 52
52. 小郡野口
53. 福童山の上 54
54. 三沢権道 55
55. 井上薬師堂 56
56. 三沢寺小路 57
57. 津古空前 58
58. 北牟田 59
59. 横隈十三塚 60
60. 三沢古賀 61
61. 力武宮脇

第2図 周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)

古墳時代前期まで継続することがわかっている。その後、5世紀前半代には集落が再形成され、カマドを付設する竪穴住居がみとめられる。

西島遺跡では古墳時代後期の集落がほとんど確認されていない。周辺の三沢中棚田遺跡からは西島遺跡で未検出の古墳時代後期の集落が確認されているが、建物は掘立柱建物しか検出されていない。三沢上棚田遺跡は中棚田遺跡の北側に隣接しており、同一の集落と捉えられている。両遺跡は丘陵から一段下がった現水田面に位置し、建物は掘立柱建物のみで構成されるなど、西島遺跡が立地する台地上の遺跡とは何らかの格差を窺わせており興味深い。

8世紀代の遺構は、3・4区で掘立柱建物、溝、土坑などが検出されている。道路拡幅により実施された6・7区の調査では、8世紀後半代を主体とし、一部9世紀代にかかる土坑や井戸が検出されている。西島遺跡3区、三沢栗原遺跡周辺、前述の三沢上棚田遺跡周辺では8世紀代の瓦片が出土しており、近辺に窯跡もしくは寺院が存在した可能性を示唆している。3区の調査では掘立柱建物群しか検出されなかったが、集落の主体は東側へ延びる丘陵上にある可能性を残している。5区の調査では、2間×5間、3間×5間、3間×4間以上の主軸がほぼ真北軸の掘立柱建物3棟が検出されたほか、建物と並行する東西方向の柵列、南北方向の溝が1条検出されている。3区で検出された総柱建物2棟からなる倉庫群も主軸がほぼ北である。これらの主軸方位は小郡官衙遺跡第Ⅲ期建物群や大刀洗町下高橋上野遺跡とほぼ同一であるほか、出土した遺物からも8世紀の中頃から後半代と、ほぼ同時期に比定されており興味深い。

12世紀中頃～13世紀前半代にはいと、遺構遺物ともに量は少なくなるものの、土坑、溝、土坑墓などが検出されている。出土遺物には陶磁器、土師器、石鍋などがある。青磁よりも白磁の割合が高く、青磁は龍泉窯系よりも同安窯系の出土量が多い。

#### 参考文献

- 山本信夫 1979『向築地遺跡』小郡市文化財調査報告書 第5集  
宮田浩之 1994『三国地区遺跡群3』小郡市文化財調査報告書 第87集  
宮田浩之 1995『三国地区遺跡群4』小郡市文化財調査報告書 第97集  
宮田浩之 1997『西島遺跡5』小郡市文化財調査報告書 第118集  
柏原孝俊 2003『西島遺跡6・7』小郡市文化財調査報告書 第177集  
佐藤雄史 2004「西島花聳遺跡」『埋蔵文化財調査報告書4』小郡市文化財調査報告書 第188集



第3図 西島遺跡8 全体図 (S=1/250)

### 第3章 遺跡の概要

西島遺跡8は、三国丘陵から舌状にのびる低丘陵の標高30m前後の斜面上に位置する。旧地形は西側から南東側への傾斜をもつ。調査区北半では過去の造成時に著しい削平を受けており、遺構密度は希薄で遺構自体も非常に残りが悪い。遺物の出土はほとんどみられなかった。

調査区南半では、竪穴住居や貯蔵穴、炉跡など集落に伴う遺構のほか、甕棺墓1基が検出された。ピットが複数検出されているが、並びをもつものは掘立柱建物1棟のみであった。調査区内から出土した遺物は、弥生時代中期前半に比定される須玖I式段階のもので占められており、遺構の多くが同一時期であると考えられる。

調査区内にイチョウの大木があり、重機による表土剥ぎの段階で根によって、遺構面が大きく攪乱を受けていることを確認できたため、イチョウ周辺は未掘とした。

### 第4章 遺構と遺物

#### 1. 住居跡

##### 1号住居跡（第4図 図版3①～④）

調査区南側で検出した平面小判型のプランをもつ竪穴式住居である。2号住居跡、炉跡を切る。規模は長軸6.45m、短軸で3.63m、深さは最大で0.46mを測る。南東側では、幅0.36mを測る周壁溝を検出している。周壁溝以外の部分は硬化し、床面を形成している。北東側では一部硬化していない面がみられる。住居内における利用頻度の差であろうか。床面でピットを検出しているが、住居に伴うものか判断できなかつた。埋土は自然堆積である。出土した土器から埋没時期は弥生時代中期前半と考えられる。出土位置は散逸しており、住居に伴うと考えられる床面直上の出土遺物は確認できなかった。

出土遺物

##### 土器（第5図 図版5①、②）

1から11はすべて甕である。いずれも破片であり、口縁部から体部にかけてのものがほとんどで、底部は11のみである。全形が明らかなものは出土していない。1はやや傾きが強く鉢である可能性がある。

##### 石器（第17図 図版10②）

1は層灰岩製と考えられる扁平片刃石斧である。

##### 2号住居跡（第4図 図版3⑤、⑥）

調査区南側で検出された平面プラン隅丸長方形の竪穴式住居である。1号住居跡に切られ、炉跡を切る。北側は一部調査区外へつつくと考えられる。現況で長軸4.95m以上、短軸3.08m、深さは最大で0.20mを測る。南東側壁面付近で長さ約1m、幅約0.6m、深さ約0.25mの平面プラン不正楕円形の掘り込みがあり、屋内土坑と考えられる。1号住居跡と同様に支柱穴は確認できなかった。主軸方位は1号住居跡と直行する。上面、特に北東側は大きく削平を受けており、床面まで削られ埋土もほとんど残っていなかつた。1号住居跡と異なり、硬化した床面は確認できなかった。埋土直下で地山を検出したため、確認できなかった可能性がある。出土遺物は1号住居跡との切り合い付近からごくわずかに出土したが、細片のため図示しえなかつた。

## 2. 掘立柱建物

### 1号掘立柱建物（第6図 図版2②）

1号住居跡の北西側で検出された掘立柱建物である。2間×2間と考えられるが、北西側中央の柱穴は検出されなかった。柱穴間は0.88mから1.2mの幅である。長軸の中央延長部にピットがあり、棟持ち柱の可能性のあるものの、やや建物との軸がずれており、積極的に肯定できない。時期は決め手となる土器が出土していないものの、周辺の遺構から弥生時代中期と推定される。

#### 出土遺物

ピット中からわずかに土器が出土しているが、細片のため図示しえなかった。

## 3. 甕棺墓

### 甕棺墓（第11図 図版4③）

調査区南側で検出された甕棺墓である。掘り方の平面プランは楕円形で長径122cm、短径67cm、深さは最大で33cmを測る。棺は2個体の甕を合わせ口にしたもので、棺体は上下合わせて69cmと小型で、小児棺と考えられる。埋置角度は浅くほぼ水平である。棺の上面はわずかに削平されているが、比較的残りが良い。棺の合わせ口部分に粘土などの目張りは確認されなかった。甕棺墓に伴う遺物は棺の甕2個体のみである。

#### 出土遺物

#### 土器（第11図 図版5③、④）

1、2は甕である。1は上棺で2は下棺である。床面に接する部分に径1.5cmほどの焼成後穿孔が穿たれていたことを掘削時に確認していたが、復元時には穿孔位置が不明となっている。埋土中に穿孔部の破片が含まれていたのであろうか。

## 4. 貯蔵穴

### 貯蔵穴（第7図 図版4①、②）

調査区東側で検出された貯蔵穴である。東側は調査区外へと続く。平面プランは円形と考えられ、床面の平面プランも円形と考えられる。上面は削平されており、北側は攪乱によって立ち上がり不明である。規模は現況で最大径2.04mで、深さは最大1.66mを測る。壁面は床面からやや膨らみをもって立ち上がり、わずかに袋状を呈する。土層からは壁面の崩れが確認できなかったため、本来の形状を保っているものと考えられる。

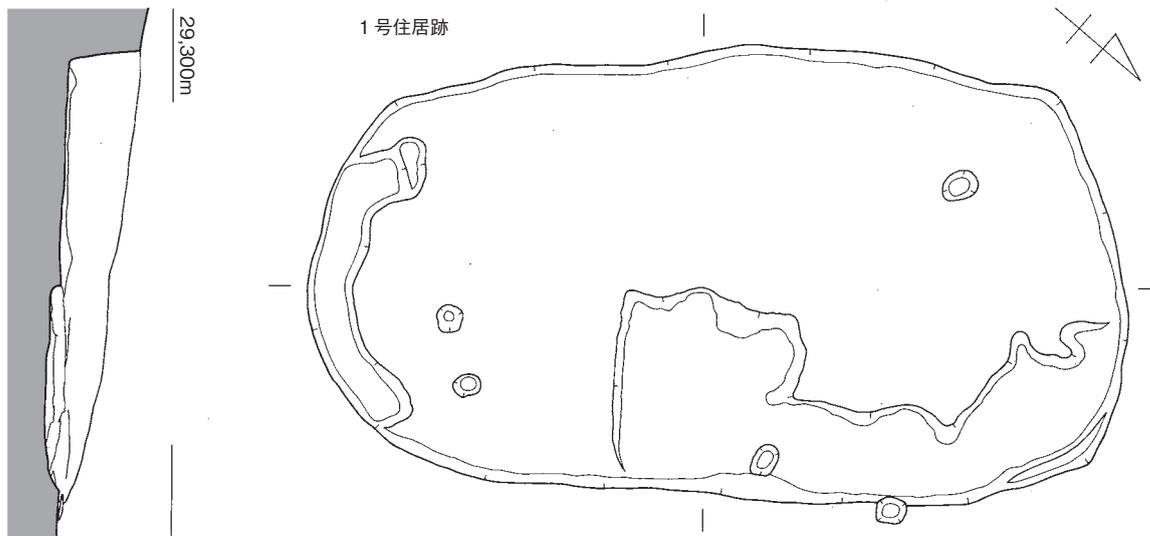
#### 出土遺物

#### 土器（第8～10図 図版5⑤～⑧、6①～⑧、7①）

1から13は甕、14から17は広口壺の口縁部、18は高坏、19は器台、20は支脚である。甕の底部はやや上げ底になったもので、ハケ目には単位の粗いもの、細かいものの2種類がみられる。また、2次被熱を受けているものがみられる。接合できたものは少ない。広口壺は素口縁のものと鋤先状口縁のもの2種類がみられる。

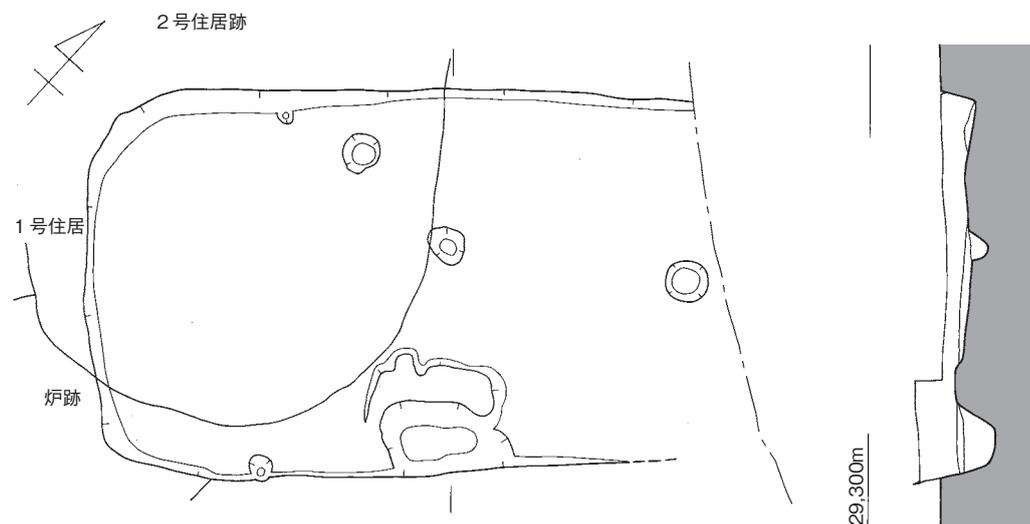
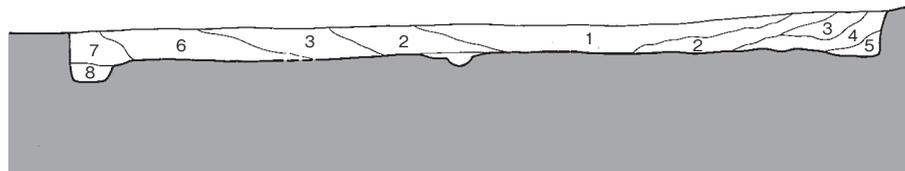
#### 石器（第18図 図版10②）

2は貯蔵穴覆土から出土した石包丁である。遺存状態は悪く、石材の判断が困難であった。背の一部と穿孔の痕跡がみられるのみである。表面には槌打痕が残る。穿孔は両面から行われている。重量11.6g。

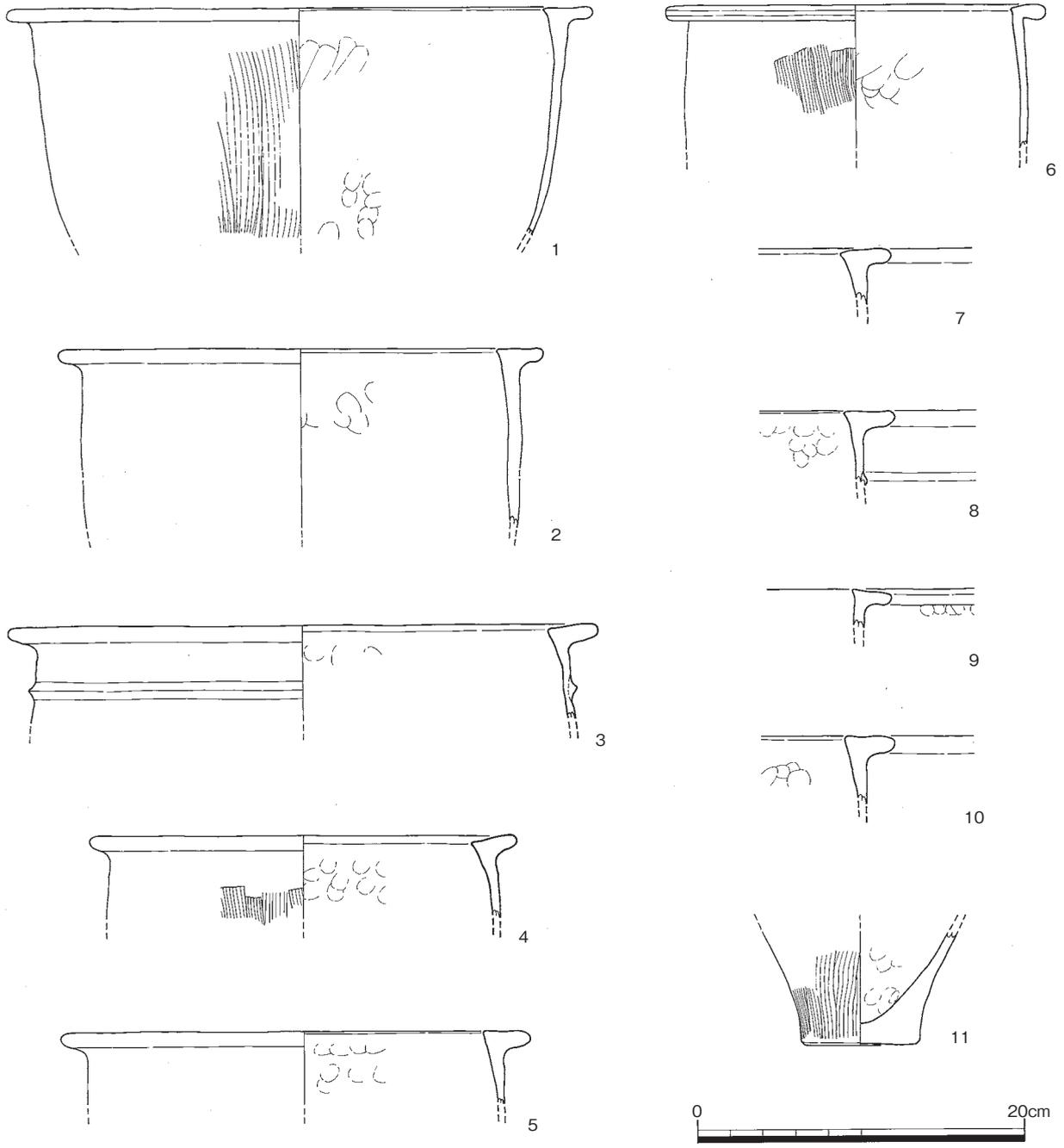


29,300m

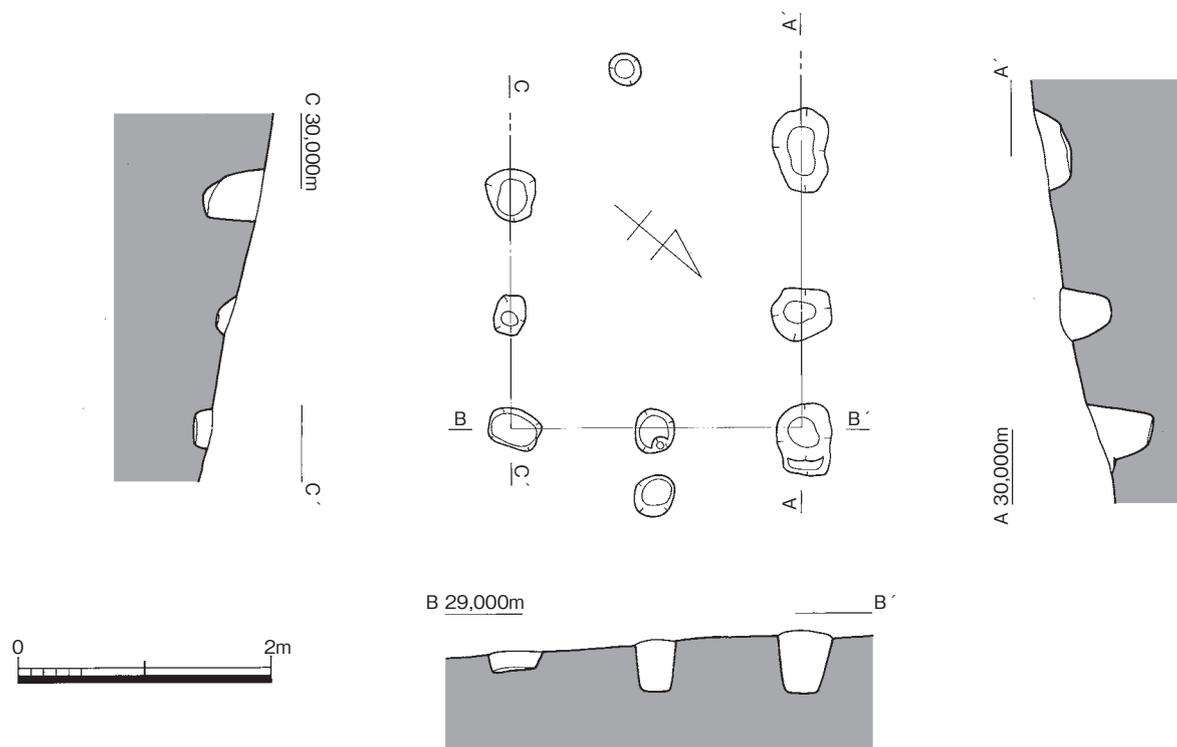
- 1 暗灰黒色土 (黄褐色土ブロックをわずかに含む)
- 2 暗灰黒色土 (黄褐色土ブロックを少量含む)
- 3 黒褐色土
- 4 暗灰黒色土
- 5 黄褐色土と灰黒色土の混土
- 6 黒褐色土
- 7 暗灰黒色土
- 8 黒褐色土



第4図 1・2号住居跡実測図 (S=1/60)



第5图 1号住居跡出土土器実測図 (S=1/4)



第6図 1号掘立柱建物実測図 (S=1/60)

## 5. 土坑

### 1号土坑 (第12図 図版2③)

調査区中央付近で検出された廃棄土坑で東側は攪乱により削平される。平面プランは隅丸長方形で、現況で長軸127cm、本来は135cm程度の規模と考えられる。短軸は95cmを測る。深さは最大で68cmを測る。床面は平面プラン不整楕円形で、ほぼ平坦であるが西側には1段テラスをもつ。埋土は下層に明黄褐色土、上層にシマリの弱い黒色土の2層で、上層のみ遺物がまとまった状態で出土している。土器は重ねられた状態で廃棄された状況がみてとれる。

出土遺物

土器 (第13図 図版7②~⑧、8①~⑥、10③)

1から4は甕、5から9は壺、10、11は高坏で12は鉢、13、14は器台、15は支脚である。

石器 (第18図 図版10②)

3は凝灰岩質粘板岩の石包丁で比較的大型品である。穿孔の痕跡がわずかにみてとれる。重量18.6g。

### 2・3号土坑 (第12図)

調査区中央付近で検出した。ともに平面プラン楕円形の土坑である。2号土坑が3号土坑を切る。2号土坑は一部掘り過ぎてしまい、3号土坑の遺物が混入している。出土遺物はわずかであったほか、多くの出土遺物が細片であったため、図示し得なかった。図示したものは確実に各土坑に属するものである。

出土遺物

土器 (第14図 図版8⑦)

1は2号土坑から出土した甕である。ほぼ完形であるが、出土位置は遺構最上面である。下層からの出土遺物はほとんどみられなかった。2、3は3号土坑出土の甕口縁部である。

## 6. 炉跡

炉跡（第15図 図版4⑤、⑥）

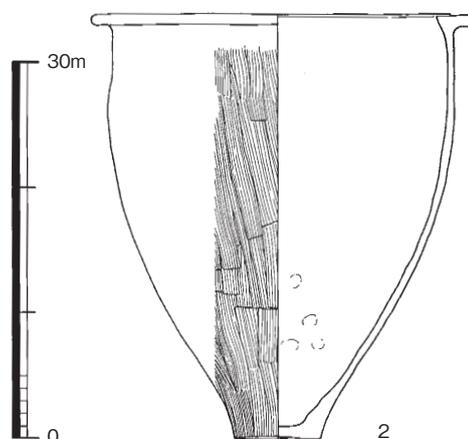
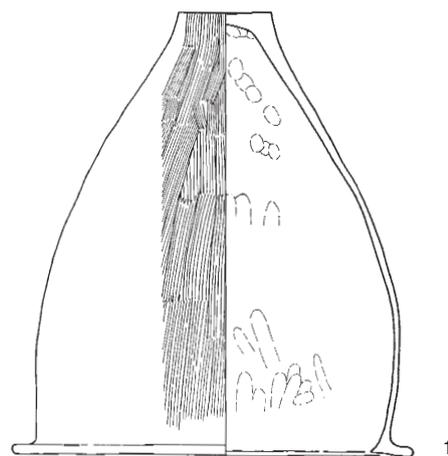
平面プラン方形の炉跡である。2基の並列するピット状の燃焼部が併設する。上面は一部木の根による攪乱を受けているほか、1・2号住居跡に切られる。平面プランは一辺約170cmのやや膨らんだ隅丸方形を呈する。深さは22cmを測る。床面は硬化しており、住居と同様、頻繁に使用されていた痕跡が見受けられる。壁際には周壁溝状の溝がめぐっている。埋土は東へ傾斜する暗灰黒色土で、遺物、燃焼部の赤色硬化面剥離による赤色焼土塊を多く含む。下層は焼土と炭化物を含む層が厚く堆積していた。

2基の燃焼部は、検出面で径23～33cmほどのドーナツ状にひろがる焼土が認められ、断面形は下膨れ気味のドーム状となる。壁面は被熱による赤色硬化面を呈しており、非常に堅くしまる。燃焼部床面の約10cm上から赤色硬化面が確認できるが、床面付近は被熱痕跡がみられない。焚口の裾は床面に向かってハの字に広がり、幅は床面付近で約36cmを測る。検出面から燃焼部床面までは最大で39cmを測る。燃焼部の前面には、長軸で105cm、短軸約40cmを測る浅いくぼみがみとめられる。

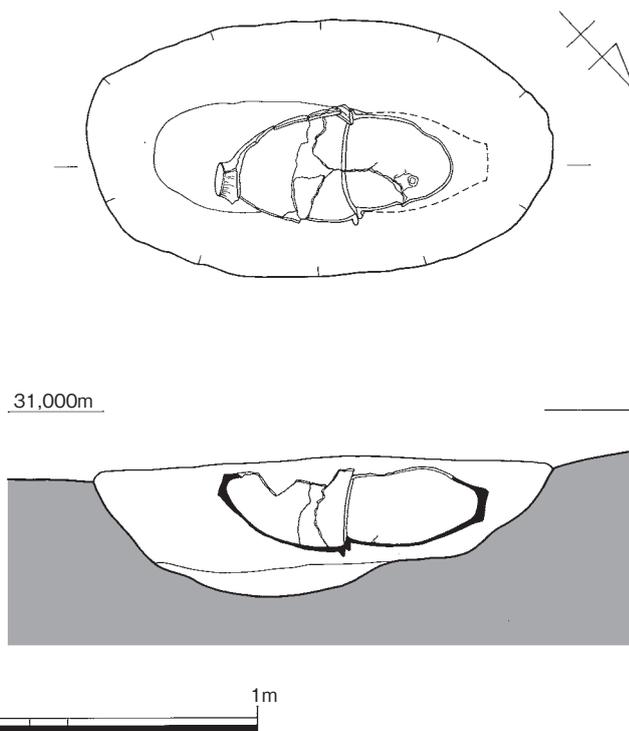
出土遺物

土器（第16図 図版8⑧、9①～⑧、10④）

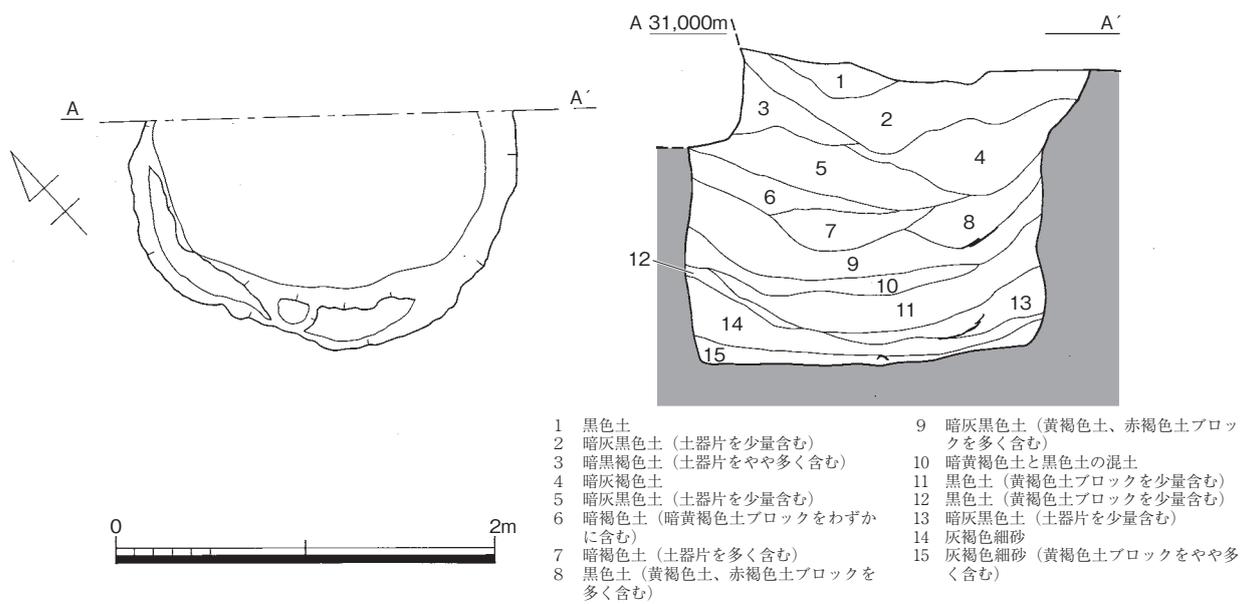
1から7は甕、8から11は壺、12から14は支脚である。



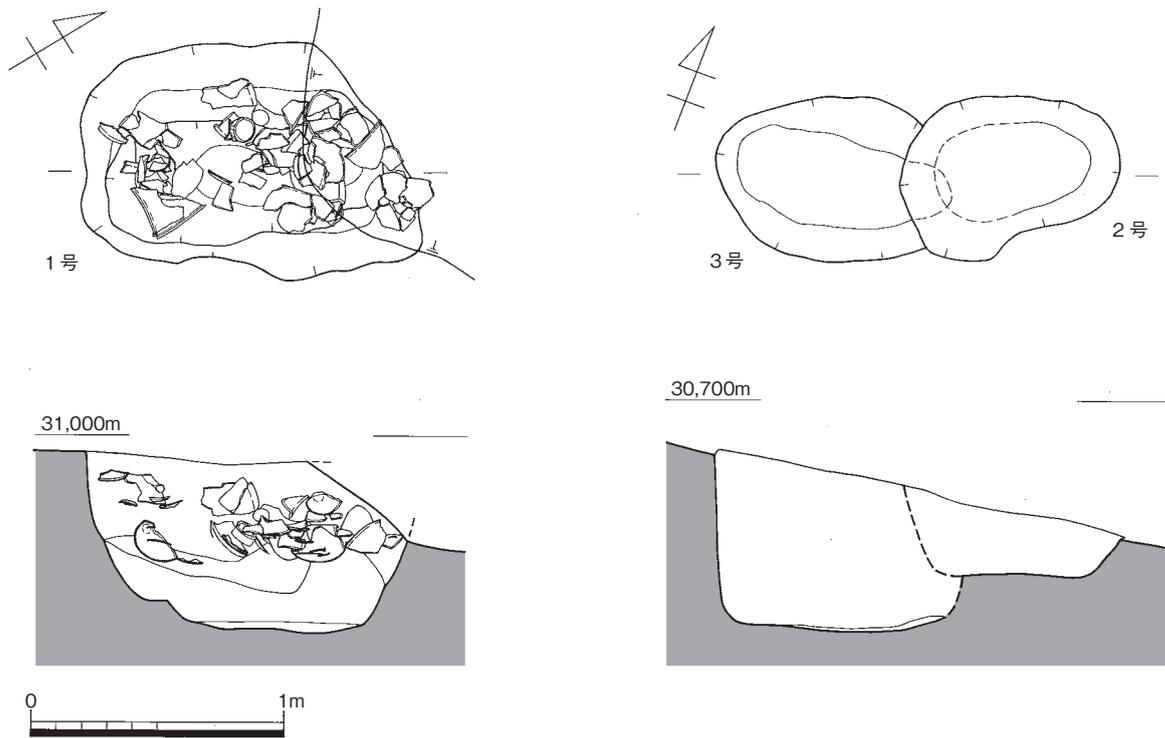
第7図 甕棺墓出土土器実測図 (S=1/6)



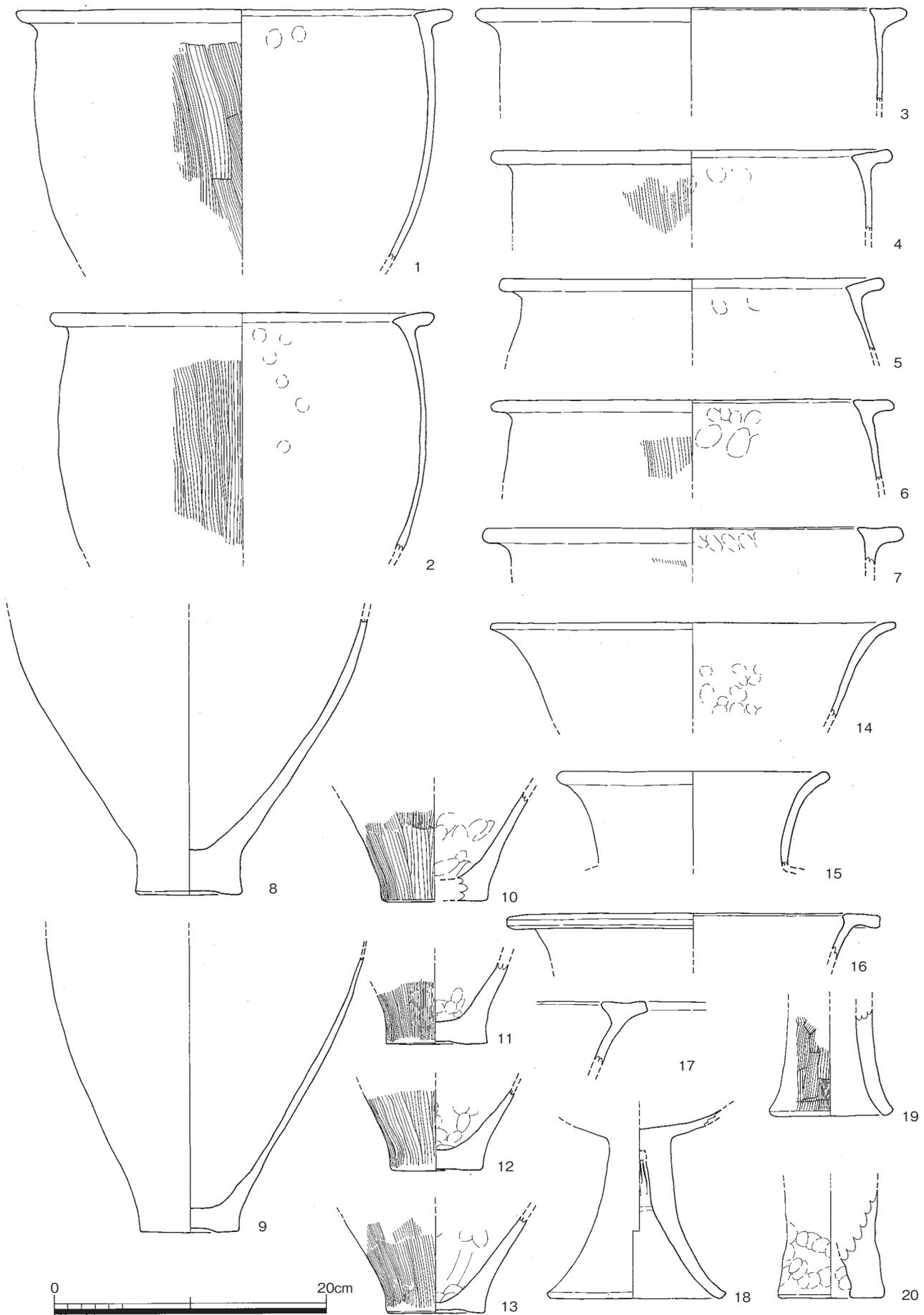
第8図 甕棺墓実測図 (S=1/20)



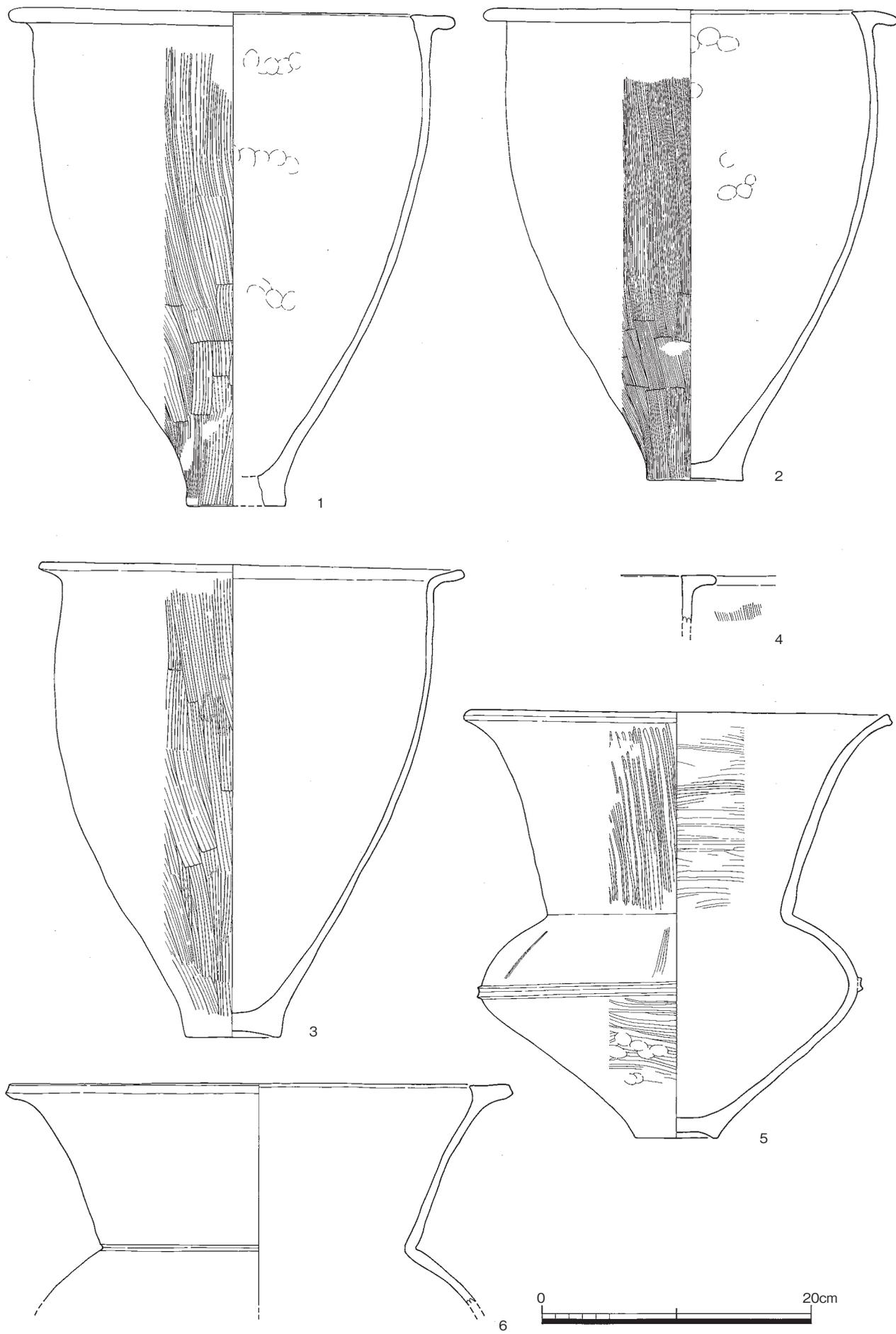
第9図 貯蔵穴実測図 (S=1/40)



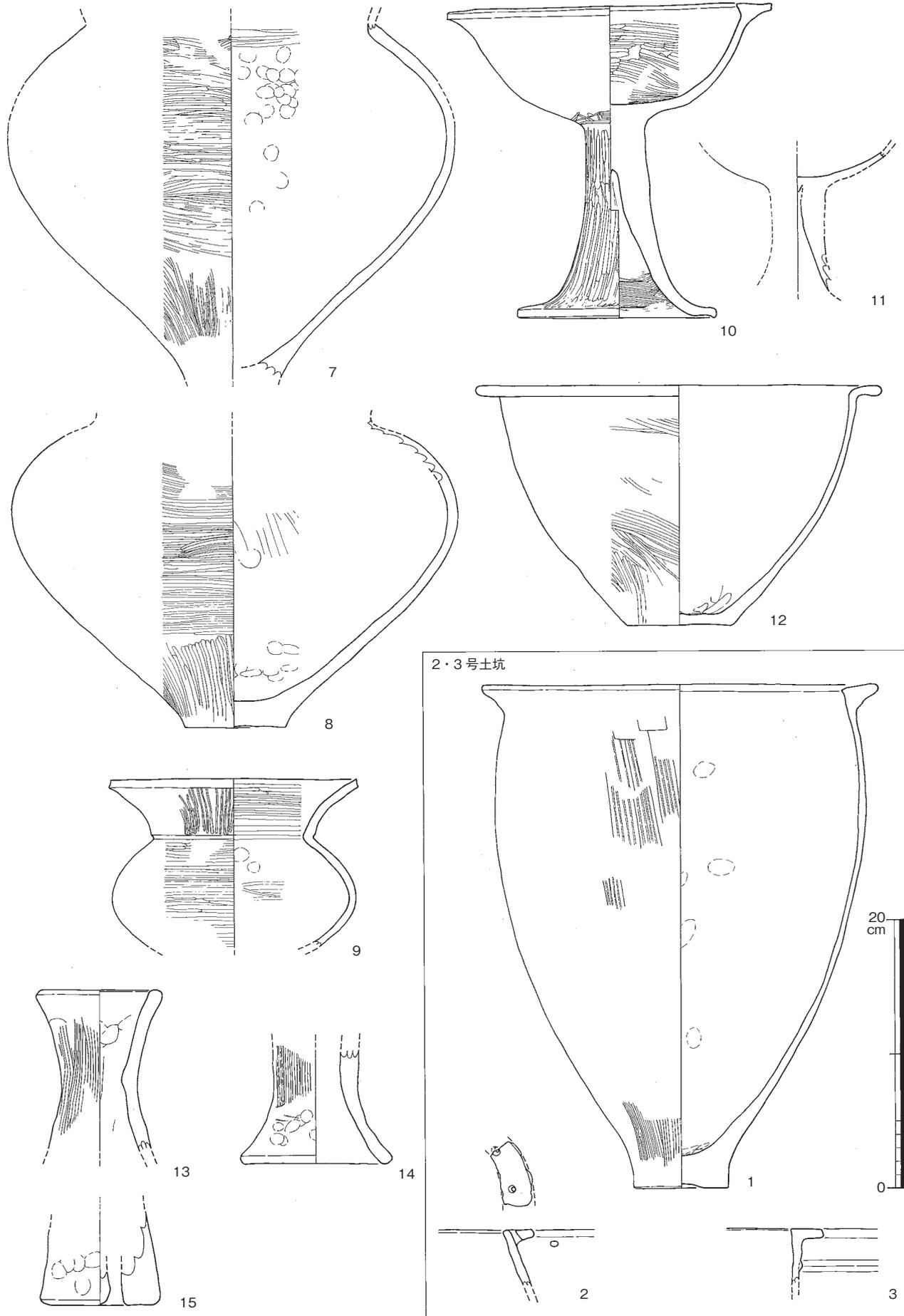
第10図 1～3号土坑実測図 (S=1/30)



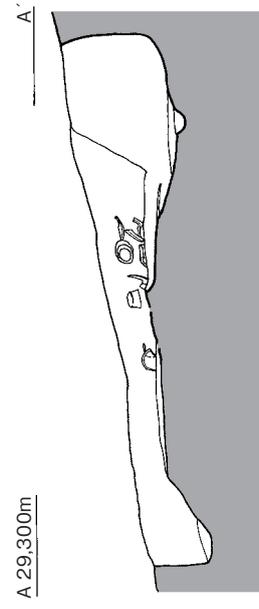
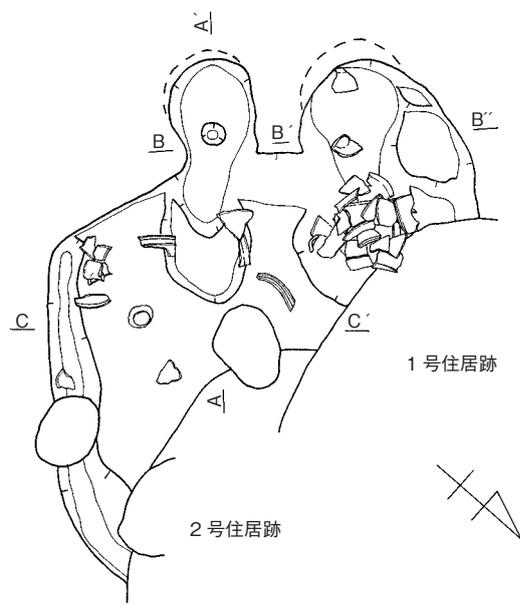
第 11 図 貯蔵穴出土土器実測図 (S=1/4)



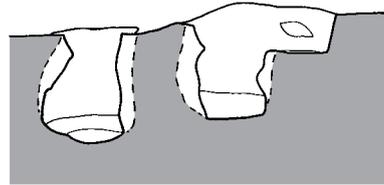
第 12 图 1 号土坑出土土器实测图① (S=1/4)



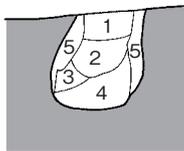
第13图 1号土坑出土土器实测图②、2·3号土坑出土土器实测图 (S=1/4)



B 29,400m B'



B 29,300m B'

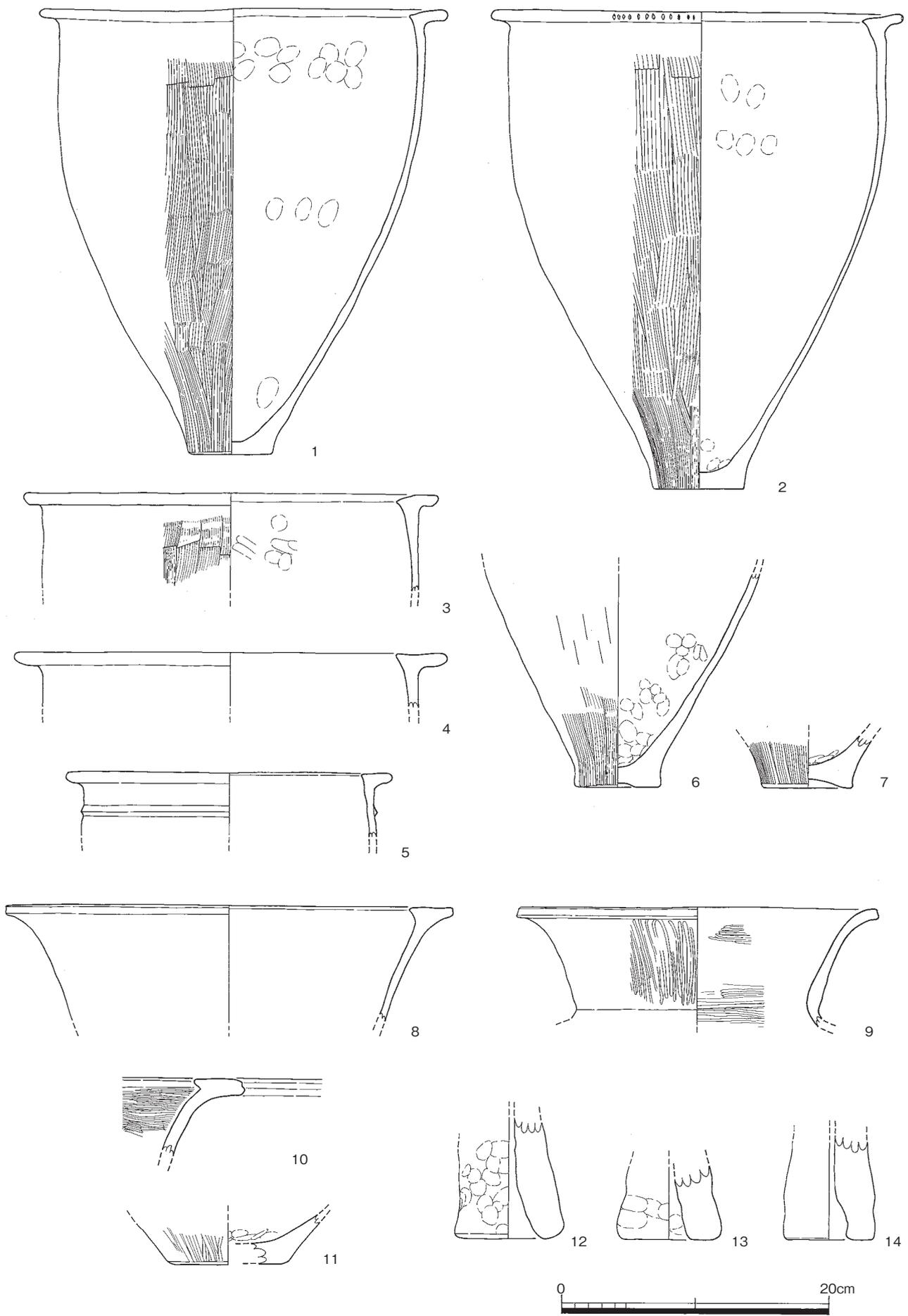


- 1 暗灰色土 (焼土塊を含む)
- 2 暗灰黒色土 (焼土塊を多く含む)
- 3 暗灰色土 (焼土を多く含む)
- 4 暗褐色土 (焼土を多く含む)
- 5 被熱による赤色硬化面

C 29,300m C'



第 14 図 炉跡実測図 (S = 1/60)



第15图 炉迹出土土器实测图 (S = 1/4)

## 7. その他の遺構と遺物

### ピット、包含層（第3図）

今回の調査地点では全体的にピットの検出数は多いとは言えない。数ヶ所まとめて検出した範囲もあるが、並びをもつものは確認できなかった。出土した遺物もごくわずかである。ピットからの出土遺物はすべて埋土中からの出土であり、ピットに伴うものは確認できなかった。流れ込みで混入したものと考えられる。以下、ピットから出土した図示可能な遺物を示す。

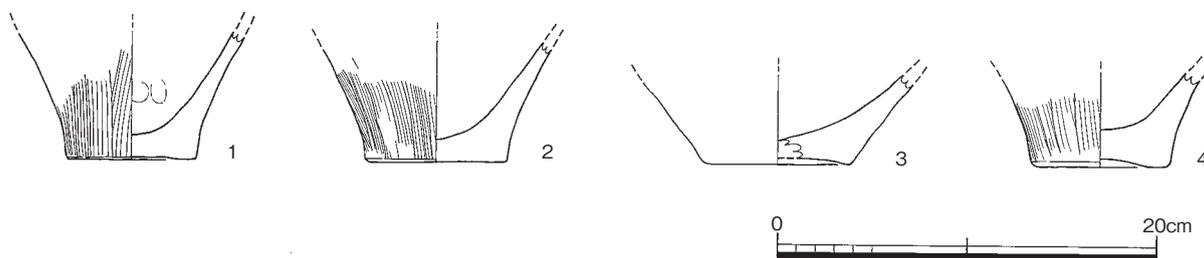
### 出土遺物

#### 土器（第16図 図版10①）

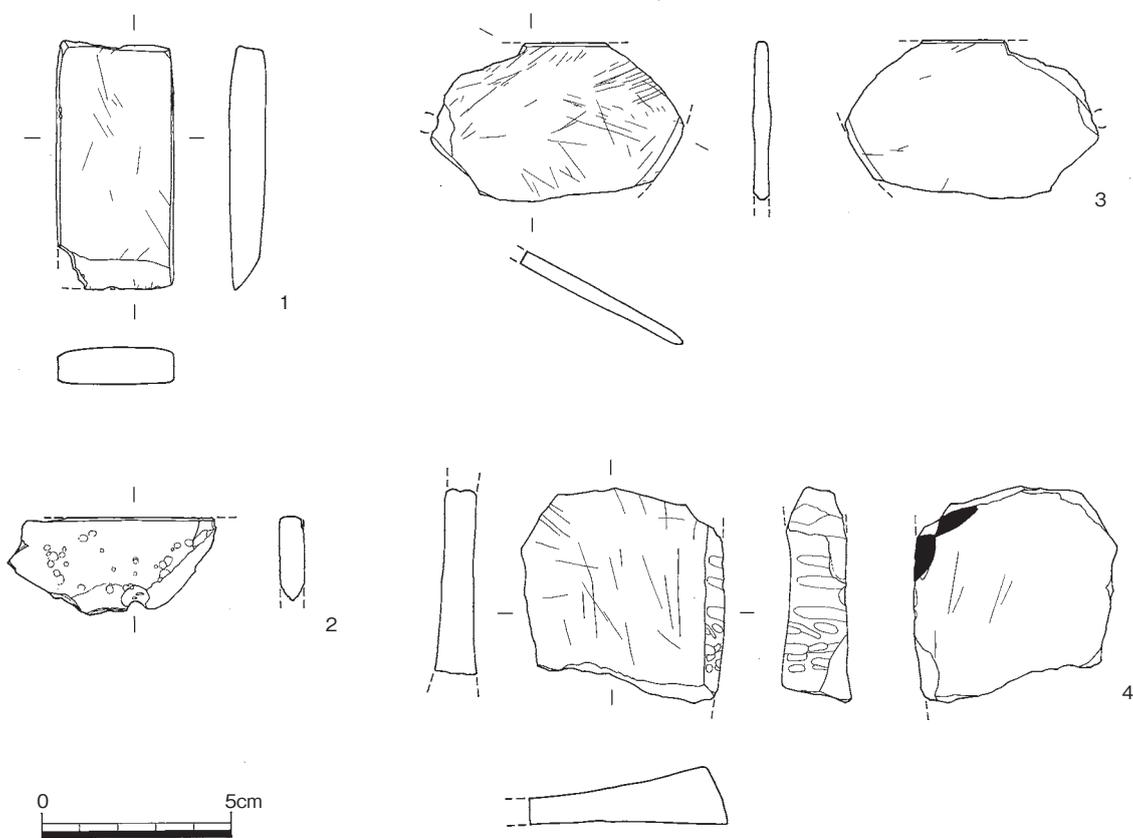
1から4は甕底部である。1から3はピットから、4は包含層から出土した。

#### 石器（第17図 図版10②）

4はピットから出土した流紋岩の砥石である。側面には幅3.2mmほどの線条痕が確認できる。重量51.0g。



第16図 ピット・包含層出土土器実測図 (S=1/4)



第17図 出土石器・石製品実測図 (S=1/4)

## 第5章 調査の成果

西島遺跡8で検出された主な遺構は竪穴住居2軒、掘立柱建物1棟、貯蔵穴1基、廃棄土坑1基、甕棺墓1基、炉跡1基である。出土遺物からは時期差がほとんどみられず、弥生時代中期前半（須玖I式段階）のものであり、遺物の出土しなかった遺構もこの時期に属するものと考えられる。

### 炉跡について

西島遺跡8において、特筆すべき遺構はカマド状の構造を呈する炉跡である。斜面を利用した焚口を設けているもので、地表面に円形の穴を設け、煮沸具を設置する構造と推測される。燃焼部壁面の赤色硬化面からみてもその火力は強力であったことが推測され、その形態からも初現的なカマドと違って差し支えないものである。壁際で検出された周壁溝状の溝は、燃焼部の反対側へ緩やかに傾斜しており、排水を目的としたものと推測される。柱穴は遺構内外ともに検出されていないが、上屋が付随する可能性は否定できない。出土遺物と住居との切り合い関係から、弥生時代中期初頭～前葉に比定される。土器焼成遺構などの可能性も検討したが、西島遺跡2区で検出されている弥生時代中期前半の土器焼成遺構とは構造が異なる。同様の構造をもつ例は、小郡市北松尾口遺跡II地点の28号住居、宇美町観音浦遺跡群註、春日市門田遺跡にみられる。いずれも燃焼部が2基並列した状態で検出されている。

遺物の出土状況から、出土遺物の多くは、炉跡で使用されていたものと考えられ、強い2次被熱がみられるものもあり、興味深い。炉跡から出土した甕の煤、焦げの範囲から、焚口の上部にあたる地表面に直接甕を設置していたと推測される。甕の内面には内容物の痕跡がみられ、直接煮炊きに使用されていたと考えられる。このような炉跡の類例は上記の3例以外には管見できなかったが、弥生時代中期における炊事形態を検討するうえで興味深い資料である。

### まとめ

過去の調査における西島遺跡の弥生時代中期前半の遺構は、1区の甕棺墓のほか、25・30号住居に同時期の平面プラン小判型の竪穴住居がみられるが、西島遺跡全体でも検出例の少ない住居形態である。そのほか、北西方向230mの民家建築の際検出された竪穴住居が同一時期であり、確認されている該当時期の遺構はさほど多くない。

今回、丘陵斜面部で弥生時代中期の竪穴住居が検出され、西島遺跡における竪穴住居の分布がこれまで確認されていた丘陵下部の低段丘面だけでなく、丘陵部まで広がることが確認された。

### 参考文献

- 柴田泰典・渡辺正気 1962「福岡県三井郡小郡町花聳発見の一箱式小石室」『九州考古学16』  
佐賀県教育委員会 九州縦貫自動車道福岡熊本線鳥栖地区埋蔵文化財発掘調査報告書  
『基山町伊勢山 鳥栖市永吉遺跡』1970  
浜田信也 1971「花聳遺跡」『津古内畑遺跡』第2次  
山本信夫 1974「小郡市西島出土の弥生遺物」『九州考古学』49・50  
井上裕弘 1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 第7集』福岡県教育委員会  
山本信夫 1979「向築地遺跡」小郡市文化財調査報告書 第5集  
平ノ内幸治 1981『宇美観音浦 - 上巻 -』宇美町教育委員会  
佐藤雄史 2004「西島花聳遺跡」『埋蔵文化財調査報告書4』小郡市文化財調査報告書188集

第1表 出土土器・石器・石製品観察表

器種: 弥: 弥生 法量=口: 口縁、高: 器高、底: 底径、胴: 胴部最大径、( )は復元径・残存高

出土遺構	挿図番号	図版番号	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
1号住居	第5図1	図版5-1	弥・甕	口:(35.8) 高:(14.1)	にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	口:内外:ヨコナデ 体:内:指オサエ・ナデ、外:ハケメ	
	第5図2	-	弥・甕	口:(29.7) 高:(11.0)	外:にぶい黄橙 内:橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	口:内外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ナデ	調整不明瞭
	第5図3	-	弥・甕	口:(36.0) 高:(5.9)	外:にぶい橙 内:橙	微砂粒を含む	良好	口:内外:ヨコナデ 体:内:外:ナデ	
	第5図4	-	弥・甕	口:(26.0) 高:(5.1)	外:橙 内:にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	口:内外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ハケメ	口縁端部にスス付着
	第5図5	-	弥・甕	口:(27.7) 高:(4.5)	橙	1mm以下の砂粒を少し含む	良好	口:内外:ヨコナデ 体:内:外:ナデ	
	第5図6	図版5-2	弥・甕	口:(23.2) 高:(8.9)	外:にぶい黄橙 内:灰白	微砂粒を含む	良好	口:内外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ハケメ	
	第5図7	-	弥・甕	高:(3.5)	外:にぶい橙 内:橙	2mm以下の砂粒を含む 金雲母をわずかに含む	良好	口:内外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ハケメ後ナデ	
	第5図8	-	弥・甕	高:(4.6)	外:橙 内:明褐	3mm以下の砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:外:ナデ	
	第5図9	-	弥・甕	高:(2.4)	にぶい黄橙	微砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ	
	第5図10	-	弥・甕	高:(4.3)	外:にぶい黄橙 内:橙	2mm以下の砂粒を含む 金雲母を少し含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:指オサエ後ナデ、外:ハケメ後ナデ	
	第5図11	-	弥・甕	底:(6.4) 高:(7.0)	橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	体:内:指オサエ、ナデ、外:ハケメ	底部内面にコゲ付着
甕棺墓	第8図1	図版5-3	弥・甕	口:31.7 底:7.2 高:35.4	外:橙 内:橙	~3mmの砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:外:ハケメ、内:指オサエ・ナデ	
	第8図2	図版5-4	弥・甕	口:30.7 底:6.9 高:34.1	外:橙 内:橙	~2mmの砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:外:ハケメ、内:指オサエ・ナデ	
貯蔵穴	第11図1	図版5-5	弥・甕	口:(31.0) 高:(18.6)	外:にぶい黄橙 内:にぶい橙	2mm以下の砂粒を多く含む 金雲母を少し含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ハケメ	
	第11図2	図版5-6	弥・甕	口:28.2 高:(17.6)	橙	3mm以下の砂粒を含む 金雲母・赤色土粒をわずかに含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ハケメ	
	第11図3	図版5-7	弥・甕	口:(31.7) 高:(6.9)	外:橙 内:浅黄橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ハケメか	
	第11図4	-	弥・甕	口:(29.5) 高:(6.1)	にぶい橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ハケメ	
	第11図5	図版5-8	弥・甕	口:(29.1) 高:(5.3)	外:にぶい褐 内:灰褐	3mm以下の砂粒を含む 金雲母をわずかに含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ハケメ	内外面ともに強く被熱する
	第11図6	-	弥・甕	口:(29.6) 高:(6.0)	外:にぶい橙 内:にぶい褐	3mm以下の砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ハケメ	内面に少しススが付着
	第11図7	-	弥・甕	口:(30.9) 高:(2.9)	にぶい橙	微砂粒を含む 金雲母をやや多く含む	良好	口:内・外:ヨコナデ	口縁部下にミガキ状の擦痕
	第11図8	図版6-1	弥・甕	底:7.8 高:(20.4)	橙	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	体:内、ナデ、外:ハケメか	強く被熱する 内外面にスス付着
	第11図9	図版6-2	弥・甕	底:7.1 高:(20.2)	外:にぶい黄橙 内:橙	4mm以下の砂粒を多く含む	良好	調整不明	内外面ともに強く被熱する 底部にコゲ付着
	第11図10	図版6-3	弥・甕	底:(7.8) 高:(8.1)	外:橙 内:暗灰黄	2mm以下の砂粒を含む	良好	体:内:指オサエ・ナデ、外:ハケメ	
	第11図11	-	弥・甕	底:7.4 高:(5.9)	浅黄橙	5mm以下の砂粒を少し含む	良好	体:内:指オサエ後ナデ、外:ハケメ	
	第11図12	図版6-4	弥・甕	底:6.6 高:(6.0)	外:橙 内:にぶい褐	4mm以下の砂粒を多く含む	良好	体:内:ナデ、外:ハケメ	底部外面に指頭圧痕 強く被熱する
	第11図13	図版6-5	弥・甕	底:(7.0) 高:(7.2)	外:浅黄橙 内:灰黄褐	2mm以下の砂粒を含む	良好	体:内:指オサエ・ナデ、外:ハケメ	
	第11図14	図版6-6	弥・壺	口:(29.8) 高:(7.1)	にぶい橙	3mm以下の砂粒を少し含む 金雲母をわずかに含む	良好	口:内・外:ナデ	外面はミガキ後ナデか 調整不明瞭
	第11図15	図版6-7	弥・壺	口:(20.0) 高:(7.0)	橙	5mm以下の砂粒を多く含む	良好	口:内・外:ナデか	内外面ともに被熱 調整不明
	第11図16	-	弥・壺	口:(27.4) 高:(3.5)	外:灰褐 内:橙	2mm以下の砂粒を含む 金雲母をわずかに含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ミガキか	

出土遺構	挿図 番号	図版 番号	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
貯蔵穴	第11図 17	-	弥・壺	高:(4.7)	にぶい橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内・外:ナデ	
	第11図 18	図版6 8	弥・高坏	底:(12.1+α) 高:(14.0)	外:灰褐 内:橙	4mm以下の砂粒を多く含む	良好	坏:内:ナデ、外:不明 脚:内、ナデ、外:不明	外面は強く被熱する
	第11図 19	-	弥・器台	底:(8.3) 高:(7.9)	外:灰白 内:浅黄橙	微砂粒を含む 金雲母・黒色土粒を含む	良好	体:内:ナデ、外:ハケメ	外面ハケメは一部ナデ消し
	第11図 20	図版7 1	弥・支脚	底:(7.4) 高:(8.0)	外:浅黄橙 内:灰白	5mm以下の砂粒を多く含む 赤色土粒を多く含む	良好	体:内:指オサエ後ナデ 外:ナデ後指オサエ	外面は2次被熱する
1号土坑	第12図 1	図版7 2	弥・甕	口:33.0 底:(6.4) 高:36.8	外:浅黄橙~橙 内:褐灰	微砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内、指オサエ後ナデ、外:ハケメ	外面頸部から内面にスス付着 2次被熱
	第12図 2	図版7 3	弥・甕	口:30.7 底:7.1 高:35.3	にぶい黄褐	3mm以下の砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内、ナデ、外:ハケメ	
	第12図 3	図版7 4	弥・甕	口:30.7 底:7.1 高:35.5	外:浅黄橙 内:灰白	微砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内、ナデ、外:ハケメ	2次被熱による器壁の剥離 底部から胴部中位にかけて 赤変する 断面にも被熱痕(3次被熱か)
	第12図 4	-	弥・甕	高:(3.6)	にぶい橙	微砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内、ナデ、外:ハケメ	口縁部外面にスス付着
	第12図 5	図版7 5	弥・壺	口:31.0 底:6.0 胴:28.6 高:32.0	浅黄橙	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	口:内:ミガキ・ナデ、外:ミガキ 体:内:外:ミガキ・ナデ	肩部に4条1組の沈線6箇所
	第12図 6	図版7 6	弥・壺	口:(37.6) 高:(16.5)	にぶい黄褐	3mm以下の砂粒を含む	良好	口:内:不明、外:ミガキ後ナデか 体:内:ナデか、外:ナデ	調整不明瞭 肩部内面に炭化物付着
	第13図 7	図版7 7	弥・壺	胴:(33.0) 高:(26.2)	外:橙 内:黒	2mm以下の砂粒を含む	良好	体:内:指オサエ後ナデ、外:ミガキ後ナデ	2次被熱 内外面に被熱による剥離・破 裂痕
	第13図 8	図版7 8	弥・壺	胴:32.7 底:6.7 高:(22.7)	橙	微砂粒を含む 金雲母を少し含む	良好	体:内:板状工具ナデ・指オサエ・ナデ 外:ミガキ	
	第13図 9	図版8 1	弥・壺	口:18.2 胴:18.0 高:(12.3)	外:にぶい黄橙 内:浅黄橙	3mm以下の砂粒を含む	良好	口:内・外:ミガキ・ナデ 体:内、ミガキ後ナデ、外:ミガキ	
	第13図 10	図版8 2	弥・高坏	口:24.0 底:14.8 高:23.3	外:橙 内:坏:にぶい橙 脚:にぶい黄橙	精良	良好	坏:内:ミガキ、外:ナデ 脚:内:ハケメ・ナデ、外:ミガキ	
	第13図 11	図版8 3	弥・高坏	高:(10.3)	外:浅黄橙 内:にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	坏:内・外:ナデ 脚:内・外:不明	著しい2次被熱 器壁剥離のため調整不明
	第13図 12	図版8 4	弥・鉢	口:(30.0) 底:(7.8) 高:17.8	浅黄橙	微砂粒を含む 赤色土粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:指オサエ・ナデ、外:ミガキ・ナデ	2次被熱 内外面にU字型の黒斑
	第13図 13	-	弥・器台	口:(8.0) 高:(12.0)	浅黄橙	微砂粒を含む	良好	体:内:指オサエ・ナデ、外:ハケメ・ナデ	
	第13図 14	図版8 5	弥・器台	底:(11.2) 高:(8.5)	浅黄橙	微砂粒を少し含む	良好	体:内、ナデ、外:ハケメ・ナデ	外面にヘラ状工具痕
	第13図 15	図版8 6	弥・支脚	底:7.4 高:(7.0)	橙	2mm以下の砂粒を多く含む 金雲母を多く含む	良好	体:内:棒状工具による穿孔か 外:指オサエ・ナデ	
2号土坑	第13図 1	図版8 7	弥・甕	口:(28.2) 底:7.0 高:37.5	外:橙 内:浅黄橙	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ハケメ・ナデ	
3号土坑	第13図 2	-	弥・甕	高:(4.3)	外:褐灰 内:橙	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ナデか	焼成前穿孔2箇所
	第13図 3	-	弥・甕	高:(4.2)	外:橙 内:にぶい橙	微砂粒を少し含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内・外:ナデ	口縁部上面は丹塗りの可能性
炉跡	第15図 1	図版8 8	弥・甕	口:30.4 底:6.2 高:33.5	にぶい橙	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:指オサエ・ナデ、外:ハケメ	外面は帯状に黒く変色する
	第15図 2	図版9 1	弥・甕	口:30.7 底:6.8 高:36.0	外:橙 内:にぶい橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内:ナデ、外:ハケメ	口縁端部に一部刻み目が入る 底部内面にスス付着
	第15図 3	図版9 2	弥・甕	口:(31.0) 高:(7.3)	外:にぶい橙 内:橙	微砂粒を含む 金雲母をやや多く含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内、ナデ、外:ハケメ後ナデ	口縁部下に爪跡が連続
	第15図 4	-	弥・甕	口:(38.4) 高:(4.2)	外:橙 内:浅黄橙	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内・外:ナデ	
	第15図 5	-	弥・甕	口:(24.4) 高:(4.7)	外:橙 内:浅黄橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	口:内・外:ヨコナデ 体:内・外:ナデ	
	第15図 6	図版9 3	弥・甕	底:6.4 高:(16.3)	外:にぶい橙 内:浅黄橙	微砂粒を多く含む	良好	体:内:指オサエ後ナデ、外:ハケメ	底部外面は赤変 底部内面にコゲ付着
	第15図 7	-	弥・甕	底:6.5 高:(4.0)	外:橙 内:にぶい橙	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	体:内:指オサエ・ナデ、外:ハケメ	

出土遺構	挿図番号	図版番号	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
炉跡	第15図8	図版94	弥・壺	口:(33.6) 高:(8.7)	橙	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	口:内・外:ヨコナデ	器壁外面は調整不明瞭
	第15図9	図版95	弥・壺	口:(27.1) 高:(8.8)	にぶい橙	2mm以下の砂粒を含む 金雲母を少し含む	良好	口:内・外:ミガキ・ナデ	外面にスス付着
	第15図10	図版96	弥・壺	高:(5.9)	外:にぶい赤褐 内:にぶい褐	微砂粒を含む 輝石を含む	良好	口:内・外:ミガキ後ナデ	
	第15図11	-	弥・壺	底:(8.0) 高:(3.7)	外:にぶい褐 内:にぶい橙	3mm以下の砂粒を含む	良好	体:内:指オサエ・ナデ、外:ミガキ	
	第15図12	図版97	弥・支脚	底:7.3~8.0 高:(9.1)	外:浅黄橙 内:灰白	微砂粒をわずかに含む 金雲母・赤色土粒を少し含む	良好	体:内:ナデ、外:ハケメ・指オサエ	
	第15図13	図版98	弥・支脚	底:(7.0) 高:(5.5)	外:にぶい橙 内:浅黄橙	微砂粒を多く含む	良好	体:内:ナデ、外:指オサエ・ナデ	2次被熱
	第15図14	-	弥・支脚	底:(6.2) 高:(7.9)	外:灰白 内:明褐灰	3mm以下の砂粒をわずかに含む 赤色土粒をわずかに含む	良好	体:内:指オサエ・ナデ、外:ナデ	
ピット	第16図1	図版101	弥・甕	底:6.8 高:(6.7)	橙	3mm以下の砂粒を含む	良好	体:内:指オサエ・ナデ、外:ハケメ	
	第16図2	図版102	弥・甕	底:7.0 高:(6.4)	橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	体:内:指オサエ・ナデ、外:ハケメ	
	第16図3	-	弥・壺	底:(7.6) 高:(4.8)	にぶい橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	体:内:ナデ、外:ミガキか	
包含層	第16図4	-	弥・甕	底:6.6 高:(5.0)	外:橙 内:浅黄橙	~4mm以下の砂粒を多く含む	良好	体:内:ナデか、外:ハケメ	

出土遺構	挿図番号	図版番号	器種	石材	長さcm (残存値)	幅 cm (残存値)	厚さ cm (残存値)	重さ g	備考
1号住居跡	第17図1		扁平片刃石斧	層灰岩	6.6	3.1	0.95	38.2	
貯蔵穴	2		石包丁	不明	(2.55)	(5.5)	0.68	11.6	稿打痕あり
1号土坑	3		石包丁	凝灰岩質粘板岩	(4.25)	(6.7)	0.4	18.6	
ピット	4		砥石	不明	(5.7)	(5.3)	1.5	51.0	



調査区北西部 全景（東から）



調査区南東部 全景（真上から）



①住居跡と炉跡 全景（北東から）



②掘立柱建物（南西から）



③ 1号土坑 遺物出土状況（東から）



① 1号住居跡 完掘状況（北東から）



② 1号住居跡 南北土層（南東から）



③ 1号住居跡 東西土層1（北から）



④ 1号住居跡 東西土層2（北から）



⑤ 2号住居跡 完掘状況（北東から）



⑥ 2号住居跡 東西土層（東から）



①貯蔵穴 土層 (南西から)



②貯蔵穴 遺物出土状況 (南西から)



③甕棺墓 遺物出土状況 (東から)



④炉跡 完掘状況 (北東から)



⑤炉跡 燃焼部近景 (北東から)



⑥炉跡 燃焼部 土層 (北東から)



图版 6











# 報告書抄録

ふりがな	にしじまいせき8							
書名	西島遺跡8							
副書名								
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第281集							
編著者名	龍 孝明							
編集機関	小郡市教育委員会							
所在地	〒838-0198 福岡県小郡市小郡 255-1 TEL0942-72-2111							
発行年月日	2014（平成26）年3月26日							
保管場所	[遺物]・[図版]・[写真]小郡市埋蔵文化財調査センター							
保管場所所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5147-3 TEL0942-75-7555							
ふりがな	ふりがな	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地							
にしじまいせき8	おごおりしみつさわはなぞげ 福岡県小郡市三沢字花聳	40216		33° 25' 14"	130° 32' 43"	2012.07.02 ～ 2012.08.29	600 m <sup>2</sup>	特別養護 老人ホーム
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
西島遺跡8	集落	弥生	住居、貯蔵穴、甕棺墓、炉跡など	弥生土器 石器	丘陵斜面上に営まれた弥生時代中期前半の集落 堅穴住居、貯蔵穴、甕棺墓のほか、カマド状の炉跡を検出した			

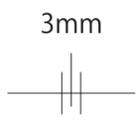
## 西島遺跡8

小郡市文化財報告書 第281集

2014年3月26日

発行 小郡市教育委員会  
福岡県小郡市小郡255-1

出版 片山印刷有限公司  
小郡市祇園1丁目8-15



# 西島遺跡 8

—福岡県小郡市三沢所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第281集

2013

小郡市教育委員会

